

嗚呼吾人宗教家たる青年よこれより有為の才を抱き將
 に来らんとする二十世紀の經營者たる我々豈に能く
 日夜扶掖黽勉して有為の宗教家と成らすして可ならん
 や

病弟慰問の狀

中一 膝見賢察

吹く秋風は木々の錦を翻へして其後の御容体如何に
 其や好きなきニスベシも出来ず樂喚き病床に呻吟せ
 らるる事嘆かんと推察はり其為し得べくば毎月にも繪
 はがきを送りて慰め申さんとは思へども如何せん學科
 は才時も不許特に昨今は少々調ふる事ありて心ならず
 も疎音に打過し其行平惠からすや下度矣過日父
 上よりの御書信にも漸次狀方に向へりと有りし故私に

喜ひ承り来てしに昨日着の姉の文に依れば此度の試験
に首席を失ひたりとて非常に痛心感さるる由入學以來
まだ嘗て一度も人後に落ちし事なき所身の事に笑へは
てもある可笑されと知らずや試験はたゞ及落の標準を
定むるを以て目的とし一二点数の差の如きは必ずしも
學力の優劣を示せるには無之実力の如何は眞に平素
の時に於て知らやるべく笑されは入學以來首席を以て
通されし御身が一度次席に降りたりとて誰か所身の學
力首席の者に劣れりと思ひ申すへき況んや病氣の爲め
十分に勉強出来ざうし上に於てを也加之首席の者と
の平均点の差僅々二点なりと申すに非らずやア、二点
の差を以て学力を示す上に於て何程の事が笑ふべきか
かる區々たる事に心を悩すとは女女しき極みに笑はす

や宜し々勵むべし尚眞の優劣を定むるは来年の卒業試験
に其はすや今假に中學を五回周の徒歩競争に論へんか
卒業試験は猶其一回周の優劣を試すか如くに其依て四
回周目に一度人後に落ちたりとて五回周の終りに於て
能く才一着を得其は人には誰か其実力を知り申さざる
へきされは今や才が次第に降りたりとて決して落膽す
る必要無之又心を悩すへき事も無之其況んや病める為
なるもや而身の實力は人皆知る事必定にて又又来るへ
き卒業試験に於て十分の好成績を以て首席を取り世人
をして驚嘆さすへき事肝要に其なと落膽すへき事に其
はんや且つ病氣は八分迄て精神に關係致し居り其殊に
惱病は然りとすかかゆる然事に心を痛め折角快癒しつ
つある病氣をして廻復さすへけんや大度なるへし大度

なるへし見よ水々紅葉を以て飾り我等の燈火に親し
む好節に笑はずや心地勝れざる時は彼の紅葉の中に遊
び然して快より成り笑はは再びなつかしき音聲に入り
窓打開き心静かに好める葉に勵み笑可く御勤め申上る
頌首



送僧

楚水吳山不計程
問君錫杖歸何日

無心端的是平生
笑指行雲一片輕

龜口東冥

身延山